

「お世話になりました」

人生は

農学博士 佐藤剛史

私は大学院の修士課程を終えるまでは、教育大学で学びました。しかし、教員採用試験に落ちたということもあって、博士課程は他の大学の農学研究科を選びました。そしたら、全然授業についていけなくて、超落ちこぼれてしまっ、学校に行きたくなくなりました。25歳で不登校です。

ただ、私は不登校でも明るくいこうと思えました。せっかく農業の勉強をしているから、農家さんのところで修行することにしました。机の上の勉強と違って、草刈りとかコンバインの手入れとか、そういうことまで本気でやったら、何か通用する部分があるかもしれないと思ったからです。修行は1年間続けました。学校にはほとんど行かずに農家さんのところにお世話になって、ご飯を食べさせてもらいながら、夜はお酒と一緒に飲みながら毎日農作業をしました。

そこで私は本当にすごく大きなことを学びました。働くってどういうことか。環境を守るってどういうことなのか。家族って何のためにいるのか。地域って何なんだろう。生きるってどういうことか。その1年で、いろんなことを教えてもらいました。そしたら、何か自分に自信がついてきたんです。勉強よりもっと大切なものがあって、それがどんどん身に付いている実感がありました。

ある日、久しぶりに大学に行ったら、1枚のポスターが目飛び込んできました。それは大学生を対象にした論文コンテストの案内で、最優秀賞は賞金100万円というものでした。

一瞬、「えっ、100万円もらえるんだ」と思ったんですが、すぐ「俺には無理だな」

って思いました。だって落ちこぼれでしたから。だけど、農家さんにすごくお世話になったので、そのことを書いて佳作にでもなって、いくらかの賞金をもらって、そのお金でお酒を買って持って行って、「お世話になりました。お陰でいい論文が書いて賞をもらいました。乾杯しましょう」と言ったら、きつと喜んでくれるだろうと思っただけです。

それで、4日間くらいでパーっと書いて、添削もせずに郵送しました。

結果は、何と最優秀賞でした。驚いたのは、後でもらったその論文コンテストの資料です。見ると、応募者がたったの1000人だったんです。今、日本に大学生は約280万人います。その大学生、みんな100万円は欲しいと思います。だけど、279万9900人は応募する権利があるのに「自分には関係ない。自分には無理だ。賞を取るのには東大の頭のいい学生だ」と挑戦することさえしなかった。

もし応募しなかったら可能性はゼロです。280万分のゼロです。でも、応募すればそれが一気に100分の1に上がるんです。しかも、全部で18人が何かしらの賞に選ばれていました。つまり100分の18ですよ。クラスで1番取るよりも楽です。

「人生ってこういうものなんだ」と思いました。「人生はできるか、できないか」じゃない。「やるか、やらないか」です。私は、失敗してもいいから、やらないと絶対に可能性が与えられないことを悟りました。私の人生を決めた瞬間でした。

今まで、「自分にはできない」「俺には無理」「関係ない」と言い訳して、やらなかったことがいかに多かつたか。いろんな可能性が目の前に広がっていたはずなのに、自分でそれをいかに捨ててきたかに気がつきました。

やってみるだけで自分の可能性はどんな広がっていく。そういうふうな考え方を変えてから、私の人生は本当に変わっていききました。

(宮崎県高等学校家庭クラブ 創立60周年記念講演会より)

※みやざき中央新聞2014年4月20日号 ホームページサンプルより

「お世話になりました」

十数年前、障がいのある子がいじめに遭い、多数の子から殴ったり蹴られたりして、亡くなるという痛ましい事件が起きました。それを知った時、私は障がい児を持った親として、また一人の教員として、伝えていかななくてはならないことがあると強く感じました。

そして平成十四年に、担任する小学五年生の学級で、初めて行ったのが「あずさからのメッセージ」という授業です。

梓は私の第三子でダウン症児として生まれました。梓が大きくなっていくまでの過程を子供たちへの質問も交えながら話していったところ、ぜひ自分たちにも見せてほしいと、保護者から授業参観の要望がありました。以降、他の学級や学校などにもどんどん広まっていき、現在までに福岡市内六十校以上で、出前授業や講演会をする機会をいただきました。

梓が生まれたのは平成八年のことです。私たち夫婦はもともと障がい児施設で、ボランティアをしていたことから、我が子がダウン症であるという現実も、割に早く受け止めることができました。

迷ったのは上の二人の子たちに、どう知らせるかということでした。私は梓と息子、娘と四人でお風呂に入りながら「梓はダウン症で、これから先もずっと自分の名前も書けないかもしれない」と伝えました。息子は黙って梓の顔を見つめていましたが、しばらくしてこんなことを言いました。

「さあ、なんと言ったでしょう？」という私の質問に、子供たちは、「僕が代わりに書いてあげる」「私が教えてあげるから大丈夫」と口々に答えます。この問いかけによって、一人ひとりの持つ優しさが、グッと引き出されるように感じます。実際に息子が言ったのは次の言葉でした。

「こんなに可愛いっちゃんも。いてくれるだけでいいやん。なんでも喜んでいい」この言葉を紹介した瞬間、子供たちの障がいに対する認識が、少し変化するように

思います。自分が何かをしてあげなくちゃ、と考えていたのが、いやここにいてくれるだけでいいのだと、価値観が揺さぶられるのでしよう。

さて次は上の娘の話です。彼女が「将来はたくさんの子供が欲しい。もしかすると私も障がいのある子を産むかもしれないね」と言ってきたことがありました。私は、「もしそうだとしたらどうする？」と尋ねました。

ここで再び子供たちに質問です。「さて娘はなんと答えたでしょう?」「どうしよう?」私に育てられるかなあ。お母さん助けてね」子供たちの不安はどれも深刻です。しかし当の娘が言ったのは、思いも掛けない言葉でした。

「そうだとしたら面白いね。だっていろいろな子がいたほうが楽しいから」

子供たちは一瞬「えっ?」と、息を呑むような表情を見せます。そうか、障がい児って面白いんだ……。いままでマイナスにばかり捉えていたものをプラスの存在として見られるようになるのです。逆に私自身が子供たちから教わることもたくさんあります。授業の中で、梓が成長していくことに伴う、「親としての喜びと不安」には、どんなものがあるかを挙げてもらうくだりがあります。黒板を上下半分に分けて横線を引き、上半分に喜びを、下半分に不安に思われることを書き出していきます。

中学生になれば勉強が分からなくなってしまうのではないかと。やんちゃな子たちからいじめられるのではないかと……。将来に対する不安が次々と挙げられる中、こんなことを口にした子がいました。「先生、真ん中の線はいらんじやない?」。理由を尋ねると、「だって勉強が分からなくても周りの人に教えてもらい、分かるようになればそれが喜びになる。意地悪をされても、その人の優しい面に触れれば喜びに変わるから」

これまで二つの感情を分けて考えていたことは、果たしてよかつたのだろうか、自分自身の教育観を大きく揺さぶられた出来事でした。

子供たちのほうでも授業を通して、それぞれに何かを感じてくれているようです。「もし将来僕に障がいのある子が生まれたら、きょうの授業を思い出してしっかり育

ていきます」と言った子。「町で障がいのある人に出会ったら、自分にできることはないか考えてみたい」と言う子。「私の妹は実は障がい児学級に通っています。凄くわがままな妹で、喧嘩ばかりしていました。でもきょう家に帰ったら一緒に遊ぼうと思えます」と打ち明けてくれた子。

その日の晩、ご家族の方から学校へ電話がありました。「お母さん、なんでこの子を産んだの? と私はいつも責められてばかりでした。でもきょう、梓ちゃんの授業を聞いて気持ちが変わったけん、ちよつとは優しくできるかもしれんよと、あの子が言ってくれたんです……」

涙ながらに話してくださるお母さんの声を聞きながら、私も思わず胸がいっぱいになりました。

授業の最後に、私は決まって次の自作の詩を朗読します。

「あなたの息子はあなたの娘は、あなたの子どもになりました。生まれてきました。生意気な僕をしつかり叱ってくれるから無視した私を論してくれるから泣いている僕をじつと待っていてくれるから怒っている私の話を最後まで聞いてくれるから失敗したって平気、平気と笑ってくれるからそして一緒に泣いてくれるから一緒に笑ってくれるからおかあさん、ぼくのおかあさんになることができます。ね、私のおかあさんになることができます。あなたの子どもになりました。生まれてきました。」

上の娘から夫との馴れ初めを尋ねられ、お互いに学生時代、障がい児施設でボランティアをしていたからと答えたところ「ああ、お母さんはずっと梓のお母さんになる準備をしていたんだね」と言ってくれたことがきっかけで生まれた詩でした。

昨年より私は特別支援学級の担任となりましたが、梓を育ててく中で得た多くの学びが、いままさにここで生かされているように思います。「お母さん、準備をしているんだね」という娘の言葉が、より深く私の心に響いてきます。

是松いづみ

(福岡市立百道浜小学校特別支援学級教諭) 『致知』2013年2月号より